読売新聞　全国版朝刊　2024年（令和6年）2月21日（水曜日）

墓参・葬儀にデジタル技術

墓石にQRコード

（抜粋）

- 札幌市の主婦(58)は、 QR コードを使った永代供養型の 「デジタル」 を利用する。 昨年、石材会社「山崎石材工業に依頼し父方のお墓をリフォームした。 その家族 用の追悼サイトに先祖の写真 ・動画、資料などを保管し、改ざんが困難なデジタルデータ を使いQRコードを刻んだ小さな石を取り付けた。 家族10人でお墓参りしたときは、スマホでQRコードを読 み取り追悼サイトに接続。明治時代の屯田兵で曽祖父の画像を孫に見せ、「大きいおじいちゃんだよ」 と教えた。主は「子孫に先 祖を身近に感じてもらえる」 と話す。
- QRコード付きの石などは 自宅にも置ける。 デジタル 開発した情報会社スマトシニア（川崎市）社長の 藤澤さんは「色あせない 先祖の記念碑。 どこでも供養 でき、墓参の負担軽減や遺品 整理に役立つ」という。。。。。

2024年(令和6年)2月21日(水曜日)　讀賣新聞　(第3種郵便物認可)

墓参・葬儀にデジタル技術

墓石にQRコード　液晶モニター祭壇

死と生を見つめて　第6部　弔いの諸相 5

弔いにデジタル技術を活用し、より機能的で印象に残るものにする動きが進んでいる。

「デジタル墓参」を体験できるのが、東京都港区のビル内にある自動搬送式納骨堂「赤坂一ツ木陵苑」だ。販売を代行するニチリョク(東京)は2022年、参拝室に小型モニター「思い出テレビ『家系樹』」を設置した。利用する家族が記録した家系図や故人の思い出の写真・動画、メッセージなどをクラウド上に保存し、モニターのタッチ操作で表示できる。現在約1000家族が無料で利用している。

その一人の会社員男性(66)は3年半前に妻を病気で亡くした。勤務先に近いため、週に何度も訪れる。画面を見つめ、子育てや九州旅行など妻と過ごした思い出を振り返る。機器の設置前は手を合わせ、近況を報告すると帰っていたが、「弔いの時間が増え、前を向ける」。

自動搬送式の墓前に設置された「家系樹」をタッチ操作する男性。「子や孫と妻の思い出を共有できます」（東京都港区の赤坂一ツ木陵苑で）＝画像は一部修整しています

札幌市の主婦(65)は、QRコードを使った永代供養型の「デジタル墓」を利用する。昨年、石材会社「山崎石材工業」に依頼し父方の墓をリフォームした。その際、家族専用の追悼サイトに先祖の写真・動画、資料などを保管。改ざんが困難なデジタルデータを使い、墓にQRコードを刻んだ小さな石を取り付けた。

家族10人で墓参した時には、スマホでQRコードを読み取り追悼サイトに接続。明治時代の屯田兵で、墓を建てた曽祖父の画像を孫に見せ、「大きいおじいちゃんだよ」と教えた。主婦は「子孫に先祖を身近に感じてもらえる」と話す。

QRコード付きの石などは自宅にも置ける。デジタル墓を開発した情報通信会社スマトシニア（川崎市）社長の藤沢哲雄さんは「色あせない先祖の記念碑。どこでも供養でき、墓参の負担軽減や遺品整理に役立つ」と言う。

昨年12月下旬、千葉県佐倉市の家族葬ホール臼井で、祭壇を映像化する「デジタルサイネージ祭壇」の実演が行われた。開発した創心社（大阪）の社員が液晶モニター5台を横に並べ中央の画面に遺影画像を、左右の4画面に花畑や山川など鮮明な背景動画を流した。

「まぶしくないね。これなら見ていられる」「読経中は映像を止めないと」。葬儀場を営む会社社長、清宮芳雄さん(53)や担当者が映像の動作環境を確認。専用のソフトを使ってパソコンなどで切り替えなどを操作できる。

清宮さんは「白木の祭壇や生花とは違った心に残る付加価値も提供できる」と、デジタル技術を生かした映像演出に注目。400万円以上かけてサイネージ祭壇を導入した。遺族の希望に沿って生前の故人を表現する映像演出を工夫し、3月以降の葬儀で活用する。

創心社によると、昨夏の発表後、30以上の葬儀社や寺院から問い合わせが相次いだ。大阪の葬儀社も3月、社葬で使う予定という。

一般社団法人「お寺の未来」代表理事の井出悦郎さんは、葬儀や供養のデジタルサービスについて持続性や収益化の難しさなどの課題を挙げる。「今は黎明期と捉えるべきだ。地縁や血縁関係の希薄化で、『個人化』した死者の記憶をデジタル技術で保存し、未来に語り継ぐチャレンジは続くだろう」

デジタルサイネージ祭壇の画面を見ながら、操作方法などを確認する清宮さん（左、千葉県佐倉市の家族葬ホール臼井で）